窣都語の回鶻碑文

唐代突厥についで漠北抗愛山脈の東、斡兒汗河畔に崛起した回鶻民族が摩尼教の信徒であつたことは、極めて明らかに知られて居たに係はらず、此民族の遺物として同河域に殘されてある碑文が摩尼教に關したことを記して居るものであるといふことは、つひ近頃になつて解つたことである、Roborovsky 及び Kozlov が一八九三年から一八九五年にかけて蒙古を旅行して、斡兒汗河域の地から持つて歸つた碑の斷片は、歐羅巴に於る此地方の摩尼教關係の史料としては實に最初のものであつたが、しかし當時はまだその性質を見究めることが出來ないで、空しくペテルブルグの博物館の一室に藏せらるゝに過ぎなかつた、一九〇四年になつて獨逸の學者の熱心なる研究の結果が發表せられて (Sitzungsber. der Berl. Akad. d. Wiss. II. Februar 1904) 一道の光明が東方の摩尼教史料の上に與へられたので、同年露西亞でも始めてその性質を定めて發表するに至つた、尤もその以前一八九六年に Schlegel 氏は之を回鶻に行はれた新宗教に關する文字として解釋して居るけれども (Die chinesische Inschrift auf dem uigurischen Denkmal von Kara Balgassun)、氏の考によると所謂新宗教なるものはネストル派の基督教を指さして居るのであつて、もとより正確の考ではなかつたのである。

一體東突厥が亡びてからは北方では回鶻全盛の時代となつたのであるが、安祿山の變に唐室が鼎の輕重を問はれ